

生命

私には二人のおばあちゃんがありました。父の方のおばあちゃんは、裁縫が趣味でした。年を重ね、いつも手が震えるようになりました。でも、裁縫道具を握ると震えがピタッと止まりました。幼かった私はその様子がおかしくて笑っていました。そんな私を見て、おばあちゃんも笑っていました。100歳を迎えたときには総理大臣から賞状を貰っていました。100歳の誕生日には双子の玄孫（やしご；おばちゃんから見てひ孫の子）を膝の上に乗せて記念撮影をしました。その後、103歳で亡くなりました。

もう一人のおばあちゃん。母の方のおばあちゃんはずっと一緒に暮らしていました。私には一つ下の弟がいました。自転車で出かけるとき、母は弟を乗せて、私はおばあちゃんの後ろに乗せられていました。ある日、おばあちゃんがバランスを崩し、自転車ごと倒れてしまいました。後ろに乗っていた私ももちろん一緒に倒れました。まだ、おばあちゃんも若かったので二人ともケガもなく、笑い合いました。私が中学生の頃、親にも反抗的な態度をとっていました。でも、おばあちゃんはずっと優しくしてくれました。そんなおばあちゃんも年をとり、認知症になってしまいました。朝起きたら玄関のカギが開いていることが多くなりました。裸足で、パジャマのまま、夜中に外に出て行っていたのです。起きて家族全員で探し回ることも増えていきました。そして、病院に入ることになりました。私の息子が生まれたときには頑張って息子の名前を覚えようとしてくれました。その後しばらくして亡くなりました。

命あるものはいつか亡くなる。たしかにそうです。この世に生まれて、大きくなって、成長して、年をとって、衰えて、いつか心臓が止まる日は来ます。だからこそ、その日々に、一瞬に、意味があるのだと思います。「誰と、どこで、何をして、何のために、時間を使うのか」、人生はこの積み重ねだと思います。

私が年老いて、心臓が止まる瞬間、自分の人生に満足していきたい。そう思えるように、今、毎日を全力で生きていきたい。こんな風に思えるのは、大好きなおばあちゃんが人生を通して、私に教えてくれたのかもしれない。

ありがとう、二人のおばあちゃん。

年 組 番 名前